

島田正治

京都文化博物館での「墨で描くメキシコ展」は終わった。出品総数百点、広い会場を埋めた。ゆったり間隔をとって作品を展示、かなり距離をもって見てもらえる。わたしの作品は近くで見ただけではなにがなんだかわからない。墨の固りであったりする。しかし、それが遠く離れて見ると、絵がはっきりしてきて物が見えてくるのである。手先の仕事ではない。むしろ体ごとぶっつけていく。体当たり画である。狭いところではもう力領は発揮されない。そんなところでは展覧会もやりたくない。広ければ広いほどよいと思うようになってきた。狭い金魚鉢ではだめだ。広い広い大海に出たい。この二、三十年描きつづけてきた大作も、今回の博物館展で初めて生きた。会場というのは大事なものである。展示ぐあいも上々だった。作品一点一点にスポットライトが当てられ効果的だった。まさに絵画鑑賞には会場選びが大切だ。

*__*__*__*__*__*__*__*__*__*

初日オープニングは朝十時、開館のチャイムが鳴ると同時に始まった。すでにおおぜいの人たちがつめかけており、やがてテープカット。この折りの模様は京都テレビ、KBSが取材、放映された。京都新聞は、昨日、作品の飾りつけをしている最中の取材で、それはカラー写真入りで、当日に掲載された。「きょうから始まる島田正治、墨で描くメキシコ展」と、タイトルがそうであった。NHKの京都支局はスタジオに出向き、夕方のテレビ番組「京いちにち」に生出演だった。約七分間でアナウンサーと対談する。作品二点がスタジオに飾られてその前で話す。わたしの方はアナウンサーの質問にこたえるだけだから、至って気は楽であり緊張もせず終わった。展覧会には、新聞を読んだ人、また、テレビを見て知ったと行って来てくれた人が多かった。

*__*__*__*__*__*__*__*__*__*

折から文化博物館で四階、特別陳列室で「白隠和尚の書画展」が開催中で、多くのファンがつめかけにぎわった。うまいぐあいに四階、五階と上下して展覧会が墨世界であり、時代こそちがえ、同じ墨の仕事が見てもらえたのは偶然の一致であると同時に、白隠和尚とこのわたしが握手させてもらった。大きな縁で結んでもらったと思うことしきりだった。

白隠和尚にこのわたしなど足元にもよれないが、昭和、平成に生きて墨画家としてのひとつの誇りはあろう。まだ結果は出ず進行中の男であることにはまちがいない。座禅はあまりやらないが、外で道端で座して描くことは、座画禅といってよいかもしれない。夢中で描いてくる。集中力と根気である。立って描くことはない。座ると心が落ちつく。わたしにはこれ以外にない。
メキシコの太陽は容赦なく暑い、これでよい。